

くろつけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十五年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十三卷六号（通巻第二三四号）

鈴



くろつけ

俳句雑誌

GLOCKE

第234号

10. 2013

ハンドベル

品川 鈴子

高音とどく予後秋麗のハンドベル

下したて羽根刷毛借りる菊掛軸かけじ

牛膝いのこずちまみれリハビリ躓けば

八つ橋の段差に躓く秋早



錦木の濃さ飛び石は突拍子

草虱まみれ師の碑を撫でし身は

九段坂落葉御門の名は知らず

千代田区の落葉溜まりが喫煙所

栗饅頭含み口角ただれたる

森賀淳介氏を悼む

忍ぶ草欲しきものもう世にあらず



玉

鈴

吟

香川 細川知子

大仏殿よりも太かり虹の脚
梅雨寒の衿足手首所在なき
手のひらにおさまる手帳夏の旅
蛩の夜言葉のみこみやり過す
恐竜となれず蜥蜴の縞走る

兵庫 細野恵久

夕闇は峡より来つつ吾亦紅
吸殻のくの字が一つ秋の浜
椋の実は甘しと子らに言ふべしや
千の鎌の手に手を重ね稲を刈る
するするとコード収まる暮の秋

愛媛 松井洋子

掬ふ手のしびれるほどの清水飲む
蟻地獄子等をたやすく黙らせる
かご盛りの鹿尾菜の香り島の市
半夏生姉にもらひしクリスタル
脚立より天仰ぐごと枇杷をもぐ

埼玉 松本清川

浴衣会の捲り十枚筆で書く
古稀喜寿も傘寿も集ひ浴衣会
十咲きて雌花一つのゴーヤーかな
雨蛙今朝の居場所に夕までも
高畝に無駄花のなき茄子実る

兵庫 松村晋

額の花ひとりで祝ふ誕生日
病兄の口に氷菓の匙はこび
合歓の花搾乳ロボット動き出し
七曲り花合歓に逢ふ峡のバス
花棟 安徳宮の屋根覆ふ

東京 松本アイ

東北の海より入りぬ夏の客
バスツアー野山をぬけて麦の秋
田植する棚田の夫婦無言なり
秋山郷岩魚づくしの山の宿
桐の花電話行き交う喜寿の年

愛媛 松本 恒子

優賞の七夕かざり灯を返す
勇み鶉をなだめし鶉匠老い兆す
読めぬ句碑指でなどれば蜘蛛の糸
蝉しぐれ甘酒茶屋の梁太き
向日葵の迷路に子らの声ぬける

愛媛 三浦 澄江

植田へと溝走り行く水の綺羅
夏雲や教師の亡父ちちの古靴
大暑なりほのと匂へる貼薬
青田うるほす水は芯まで透き通り
水打ちて来る人もなき駐在所

兵庫 水野 範子

武家屋敷案内は親子枇杷たわわ
能舞台閉ざされしまま合歓の花
選挙カー去るを合図に蝉しぐれ
空家より「火事」の警報パトカー来
空を搔く落蟬の足止まりたる

兵庫 水野 弘

楠落葉短パン娘闊歩して
梅雨時雨半パンの主婦傘ささず
楠若葉葉擦れに目覚む閨の中
風暑し半袖半パン老夫婦
囁りやそつと覗けばさつと逃げ

香川 三橋 早苗

滑走路割りて背伸ばす夏の草
雲の峰眼下にとらへ琉球へ
夜濯ぎもリゾートのうち乾きよし
日没と赤き蠍座向き合へり
美ら海をマンタも抜けし南風

茨城 三輪 慶子

鎌倉に矢倉の多し今年竹
若竹や御薄を捧ぐ足運び
七夕の朝より晴るる星談義
何をせし腰の痛みや髪洗ふ
薄荷刈る大きく息を吸ひこみて

埼玉 向江 醇子

六月や奈良の大佛三度逢ふ
夏帽子深くかぶりて百度踏む
父の日や就職の子が酒贈る
Cinemaへと美央柳の道抜けて
ケイタイを落した土地は梅雨曇

兵庫 村田 とくみ

向かひくる人も片蔭身を斜はすに
西瓜の花咲きしとて友朝電話
草とりを持ち越し日毎丈の伸び
子ら悲鳴荒梅雨しぶく飛礫ついで打ち
店頭みせに野菜盛り上ぐ梅雨晴間

大阪 師岡 洋子

父の日の引いて重たき父の椅子
梅雨滂沱明日への仕事溜りゆき
板削る鉋の往き来柿若葉
掃き出せし灯蛾一瞬の翅ひらく
遅刻者ののつそりと来る日の盛り

東京 安田とし子

ビール酌み別れの刻をひきのぼす
水仕の手措けば幽かに祭太鼓
築山に草のひれ伏す日の盛り
ふり向きてVのサインの日焼の子
解体の槌音たかき油照り

香川 横内かよこ

羅や母には全てお見透し
辛口の批評家ばかり夏大根
辛きこと親には言へぬサンダラス
捨てられず納戸に眠る水鉄砲
花火の夜門限守るシンデレラ

大阪 吉田光子

白き鳥群れたるやうに半夏生
碧眼の若きら梅雨の街ぬれつ
苔茂る説法石の座の窪み
そここゝと空蟬集む下校の児
炎暑の夜救急サイレン又も過ぐ

兵庫 明石文子

聞きそびれ歩きつづけり終戦日
空蟬や門扉にびたり我を待つ
ただ過ぎに過ぐるものなり螢の夜
海月シヨ―おでこくつつけ動かざる
白洲家の墓標へ誘ふ夏の蝶

大阪 尼寄太一郎

置炬燵乗せて双子の乳母車
就活の背広詭へ年迎ふ
針箱に妣の指貫冬の居間
父の雪袴しつかと庭弄り
孫娘宝石箱に竜の玉

兵庫 荒木治代

湯上りの素足に心地良き畳
婆娑羅髪轟音放つ滝しづき
山雨急右往左往の滝見茶屋
灼くる道行く人もなく影もなく
仏ごと多き八月父の忌も

兵庫 荒木 稔

ペンションの廃れはびこる灸花
魚水路の流れ豊かに蓼の花
打水に使ふのみの井京町家
選挙カーに負けじと蟬の競ひ鳴き
動員に食みし西瓜を思ひ食む

大阪 居内真澄

句集捲れば紙魚に兄めく七回忌
コルセット枷巻き付けて白い服
戦前の女学生卒寿走馬灯
灼けし街戦知らずの候補者
夏足袋の爪先折れて稚児禿

大阪 池田かよ

壺焼のせきたてられてをり焼ける
歌になり絵になりはまなす南限地
叩かれて叩かれて西瓜売れ残る
待ちをりしさぼてんの花留守に咲く
ふくよかな蚕豆の青亡夫へ盛る

兵庫 池田久恵

持ち味は色とラセンのねじり花
この二葉西瓜と信じ水をやる
花ほめて葉に天道虫聞いており
どくだみの八重あると聞き足止める
迎え酒そんな気持で草を刈る

大阪 石橋萬里

館涼し折紙付きの蒔絵太刀
紹を纏ひスマートフォンに憑かれたる
滝道の猿ら唾溜め脅かしぬ
川音の微かに聞こゆ夏座敷
八橋の裏に萍群らがりぬ

兵庫 市橋香

夏の雨ラジオ体操休息日
日焼けして体重落とす万歩計
空蟬やいのちの限り働けり
店頭の陶の風鈴われを呼ぶ
洞爺湖の打上花火露天風呂

愛媛 伊藤マサ子

七変化村に一つの水車小屋
石鎚山も世界の富士も山開き
俯きて睡毛の長し合歓の花
明日の朝咲く膨らみの紅はちす
蜘蛛の囿の毎年同じ軒端かな

大阪 井上あき子

寝不足の眼をよぎる梅雨の蝶
方丈で手揉みの新茶もてなされ
栗の花通いつめたる無人駅
蓄えし古き梅酒の忘れられ
捕虫網さ迷っている窓の外

愛媛 今井忍

点滴の窓に燕の宙返り
巢立つたび淋し数多の車庫燕
落ちそうな子燕見惚れ遅れけり
校門に張り紙燕子育て中
港の灯滲む緑雨の珈琲館

鈴の奏

品川鈴子選

横たはる電柱古りぬ男梅雨 兵庫 稲山 忠利

植田中鳥の目をもて苗を足す

卯波立つ構造線の神の島

舗装路の毛虫全速力を出す

忌の明けて車窓の山に虹立ちぬ

昼寝覚夫に目力戻りたる

病床の母に滅塩梅干を

美容師にまかせ居眠り夏の午後

皆がまづ箸を伸ばして水茄子漬

人違ひしたりされたり鉾祭

水占の凶は流して貴船川床

柿の葉で包みし鮎の鱈しんちなる

ト口箱の山成す築地夏の暁

紋付きの席深々と喜雨の小屋

すててこや洒落者になり見せ付ける

青芝の幼走りは予知不能

丸ポスト今もある街燕来る

べつたりと腹這ふ犬も夏ばてか

兵庫

板倉眞知子

大阪

山野美賛子

兵庫

太田 健嗣

大阪

坂本 正史

鉾建つる男の背に雨はげし

夏見舞好きなスケッチ添へもして

ギヤマンの盃になみなみ食膳酒

裸子の這ひ這ひを追ふ風呂上り

霊山の太玻璃伝ふ作り滝

川沿ひに俄造りの涼み茶屋

老鶯に招かる丘の投票所

朝涼の山門犬の盲なる

開墾のあの日日よぎる草いきれ

遠き日ののぼり渡御来る市電道

家中の時計が狂ひ梅雨長し

昂ぶれど梅雨の噴水きらめかず

季語探す大歳時記の黴臭し

熱帯魚薄し胎児も透く思ひ

朝蟬の高速飛翔青空へ

放たれし子鴨青田に走り入る

土手道の出合頭に青大将

青鷺の静かに舞ひて暮れゆけり

兵庫

坊野貴代美

兵庫

西田 敏之

高知

田村 嘉章

大阪

八幡 操

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子評
四句く十句 林 哲夫評

*選句は全て 品川鈴子

卯波立つ構造線の神の島

稲山 忠利

卯波は陰暦四月頃の季節の変わり目に卯の花がなびく様なゆったりした高波。この島は古来から神が鎮座し、島自体が御神体とし海域の守護を果たしてきた。だが現代の地球物理学に依れば規模の大きな断層群、中央構造線の類が在るそう。知らぬが佛と解った不安。

美容師にまかせ居眠り夏の午後

板倉真知子

暑い夏の午後に美容室の順番待ちに草臥れて漸く自分の番が来た、椅子に座ってほっとする。行き付けの気楽さで髪型を美容師に「お任せします」と依頼、安心して居眠りしている間に少し若返り、新しい変身が叶う。

水占の凶は流して貴船川床

山野美賛子

水占みずうらは水を用いて占うことで多くは水に影を映し、水を

飲み或るいは水の増減によつて吉凶を判断する。盆地の蒸し暑さを逃れて京都市左京区鞍馬の清らかな溪流には都人が涼気を求める。憂きことは水に流して川に設えた床で京料理を楽しむ。

ト口箱の山なす築地夏の暁

太田 健嗣

今年は本当に暑い夏でした。でも築地市場ともなれば早朝から老・壮・青の業者達が集つて大声を出し乍ら糶りが始まります。「ト口箱の山なす」が糶りの始まる前の緊張感をよく表していると思います。

夏見舞好きなスケッチ添へもして

坂本 正史

この頃は暑中見舞もメールですます方が多い中で、自筆のスケッチまで添えた夏見舞とは何と素晴らしい事でしょう。私達昭和一桁生れの者はやはり昔乍らの葉書に手書きのものが気持が通じ易いように思います。スケッチがあれば

ば尚更です。

ギヤマンの盃になみなみ食膳酒

坊野貴代美

ギヤマンの盃とはいかにも涼しそう。これになみなみと酒を注いで、打水した庭からはちよっぴり涼しい風も吹いてきて、となれば酒も食事も一段と進むことでしょう。今年も夏負けしない様に。

老鷲に招かる丘の投票所

西田 敏之

春先の様な若々しさはないものゝ、聞きなれた夏鷲の声に誘われて丘に登る。年を取ると一寸した坂でも大儀になります、鷲に元気を貰って投票所に足を運びましょう。さて今日は自民党かな野党かな？。

季語探す大歳時記の黴臭し

田村 嘉章

折角よい題材を見付けても、季語がしつくり来ないことはよくあります。手許の季寄せや歳時記では物足らず、本棚から重たい歳時記を出して来たものゝ、滅多に使わな

いので黴の臭いがする。でも古い歳時記には最近使われなくなつた雅びな言葉もあり、さぞヒツタリの季語が見付かつた事でしょう。

朝蟬の高速飛翔青空へ

八幡 操

今日も朝から蟬がやかましく鳴いている。庭へ下りて近くとパツと飛び立って空高く上って行った。「高速飛翔」の文字が子供の頃蟬取りに行つて逃げられた時の、飛び立つ瞬間のすばしこさを思い出させてくれました。

若葉風丸くなる背を押さないで

栗栖八重子

年を取るとどうしても背中が丸くなり勝ちで困ります。(私もそうです)若葉を通して吹いてくるやわらかい風ですが、それが背中を押して来る。風さんどうかそんなに押さないで、私はもつとゆつくり若葉みちの散歩を楽しみたいの。